つくられたイメージを超えて　特集１

西洋音楽史の中の女性たち

今年９月に開催する男女平等推進フォーラムでは、『心揺さぶる珠玉の音色―知られざる女性作曲家の世界―』と題した講演とコンサートをお贈りします。

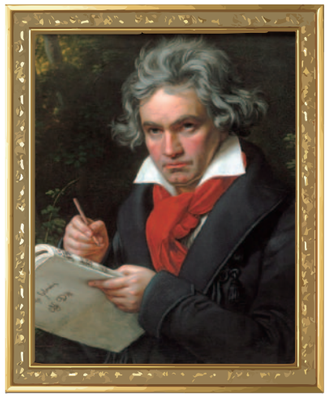
そこで今回は、当日のお話と演奏をより深く感じていただくために、前半は西洋音楽史の中の女性たちがどのような時代背景のもとで音楽に携わっていたのかを取り上げ、後半は講演会講師である小林緑さんの女性作曲家に対する想いをお伝えします。

知られざる女性作曲家とその時代

作曲家は男性だけ？

西洋音楽史は、その時代や音楽様式によっていくつかに分類されており、１７５０年頃～１８２７年を古典派音楽、１８２７年から１９２０年頃までをロマン派音楽と呼んでいます。代表的な作曲家として古典派では、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなど。ロマン派では、ショパン、ワーグナー、チャイコフスキーなどがおり、馴染みある曲の作曲家としてご存知の方も多いと思います。

ところで、有名なピアノ曲『乙女の祈り』。この曲の作曲者が女性だということをご存知でしたか（テクラ・バダジェフスカ　１８３４－１８６１）。クラシック音楽というと、「作曲家すなわち男性」というイメージを抱きがちですが、実は個性豊かな作品を残した女性たちが大勢いたのです。彼女たちはどんな時代に、どのように音楽と向き合っていたのでしょうか。19世紀のドイツを例にみてみましょう。



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
（1770～1827年）

市民階級に生じた「男は外、女は内」という考え

18世紀末から19世紀にかけてのドイツでは、貴族でも農民でもない、さまざまな人々が市民階級に含まれるようになりました。その典型的な職業は、商人、実業家、手工業者、官吏、医者、弁護士、大学教授、聖職者、ジャーナリストなどで、おおむね都市に住み、教養を身につけ、職業活動を通じて金銭を得ているといった共通点があります。

このような生活スタイルの家族にとって、仕事と家事・子育てを誰が担うのかという問題の最も合理的な解決法と考えられたのが、夫は外で働き家族を養えるだけの稼ぎを得て、妻は夫を支えるべく家庭を守るというものでした。

当時存在した、女性の本分は「妻、主婦、母」にあるとした女性像は、この「男は外、女は内」という考え方に基づいており、それは工業化の進展にともなう合理化によって形成された分業構造が、工業化社会の重要な担い手である都市の小家族のなかにまで浸透した結果生じた性別役割分担だったのです。

『ピアノに寄る少女たち』1892年製作
ピエール＝オーギュスト・ルノワールの絵画

市民階級の女性たちの音楽実践の場

こうした市民階級にとって、音楽が教養形成の不可欠な要素とされ、その階層の女性たちも、ある程度ピアノが弾けて歌が歌えることが必須条件となりました。しかし、女性が音楽の素養を身につける目的は、あくまでも教養の獲得と家庭生活を楽しく彩るため。限度を超えてはならず、公の場で活躍することは女性の本分に反するとされていたのです。

そのような中、既婚女性でも無報酬ならば舞台に立つことが許されたので、彼女たちはしばしば家庭音楽会やサロン・コンサート、慈善演奏会などに出演し、各都市の音楽生活を豊かなものにしていました。そうした女性たちの傑出した例といわれるのが、ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼル。ロマン派の作曲家フェリックス・メンデルスゾーンの姉である彼女は、卓越したピアノ演奏だけでなく、６００曲近い作品を書いたとされています。

ファニーは才能発揮の場を私邸での音楽サロンに限ったのですが、このサロンこそ、教会、オペラの舞台、コンサート会場など男性支配が際立つ19世紀の音楽シーンと比べ、女性の主導による例外的文化空間としての重要性を持っていました。

ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼル
（1805～1847年）

女性職業音楽家の誕生

家庭を守ることが期待され、そこを飛び出して職業活動を行うことを強く戒められていた市民階級の女性たち。その中で、境界を飛び越え、公開の舞台に立ち、その報酬で自身と家族の生活を支える、まさに音楽を職業にした女性たちもいたのです。そんな職業音楽家として活躍した女性の代表格が、クララ・ヴィーク＝シューマンでしょう。

クララは、父から英才教育を受け、天才少女ピアニストとして活躍し、音楽家のローベルト・シューマンとの結婚後も家庭を切り盛りし、多くの子供を産み育て、病気の夫を支えながら、ピアニストとして国内外を問わず活発な演奏活動を継続しました。

楽器と女性

18世紀半ばから19世紀にかけて、女性は職業音楽家になることを強く戒められただけでなく、弦楽器や管楽器を演奏すること自体がタブーとされていました。

その理由にあげられるのが、男性が女性を見るまなざしで、例えば、チェロを演奏する女性の姿勢（本体下部を両足ではさみ、上部から棹にかけての部分を胸から肩にもたせかける）が、男性の欲望を刺激するというのです。また、楽器の響きが引き起こす連想（トランペットの響きは戦場を、ホルンは狩猟を連想させる）が女性の特性に反するので、管楽器も女性の楽器ではないとされました。

では、女性に最もふさわしい楽器とされたのは何か。それがピアノです。ピアノは、楽器と身体が接触する部分が最も少なく、最も身体を動かさずに演奏可能であり、優美な横顔を見せることができる。また、持ち運びできないので女性を家庭に囲い込むことが可能であり、一人で楽しむことができる…。こうしてピアノは、家庭で音楽をたしなむ女性の楽器になったばかりでなく、音楽を職業とする女性の大半が演奏する楽器となりました。

『クラシック音楽と女性たち』より